

2011 3

あけぼの

子どもが輝く情景—この時代に健やかな育ちを求めて

特集 子どもが“育つ”のを邪魔しない子育てを早乙女 愛×汐見稔幸
対談 子ども自ら輝いている五味太郎 人間の友達、自然の友達
子どもが輝くために、母親の輝きを大日向雅美 本田 亮

連載 “ことばの杜”への小道 Part II / 異世代交流で人間力を養う—学校と地域をつなげる「鎌倉てらこや」活動 お相手・池田雅之氏／山根基世
ミステリアスな日々／過去の力木崎さと子
活憲とヒューマンライツ（人権）／「閉塞の時代」を変える市民の力伊藤千尋
光と風のおくりもの／耳の中の虫三浦暁子
キリストの足跡／家の教会百瀬文晃





山根基世

やまね・もとよ

NHK退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書『ことばで「私」を育てる』『「ことば」ほどおいしいものはない』ほか。



“ことばの杜”への小道

Part II

第3回



池田雅之

いけだ・まさゆき

「鎌倉てらこや」理事長。早稲田大学大学院教授。同国際言語文化研究所所長。編著『てらこや教育が日本を変える』訳書『ラフカディオ・ハーンの日本』



異世代交流で人間力を養う —学校と地域をつなげる「鎌倉てらこや」活動

池田 確かに「鎌倉てらこや」では、いろんな世代の人にお会えます。今は人間関係が貧しくなっている。先生と子ども、親と子どもという関係が強すぎますね。「鎌倉てらこや」が続いている一つの大きな要因は、複眼の教育、つまり複数の眼が子どもたち、若者を育てているからだろうと思います。その複眼の教育を大事にしていて、できるだけ三世代、四世代がお会える場を作っています。精神科医の森

なつていて、それがあれば、人間はこういうときこういうふうに振る舞い、言葉はこう動くんだことが多い。多様な人間関係と言葉はセットになつていて、それが限れば、人間はこういうときと学べる。その関係が少ない以上、全国津々浦々に異年齢の人たちが集まる場を作つていかなければいけない、と言っていたのですが、すでに行動されている方がいらっしゃる。

山根 NHKの現役時代に、全国各県のそれぞれの支局のアナウンサーたちが、子どもの言葉を育てる活動に取り組んでいく仕組みを考えました。子どもたちがとんでもない、自分で自分を不幸にするような事件を引き起こしていく、その裏に、言葉の力の欠落のようなことがあると指摘されていて、私たちには八十五年の歴史があつて、それなりにノウハウを蓄積していますので、話し言葉について何か貢献できるのではないかと思いまし

複眼の教育—三世代、四世代が
出合える場を作る

下一先生のお話をお聞きになつて、学生を参加させていこうと。

池田 森下先生は精神科医として二十年、子ども若者の、引きこもり、不登校、自殺未遂、拒食症などを診てらした方です。でもこれからは、いわゆる健常者といわれる子どもたちを守り育てることをやらなければ、日本はどうなるかわからぬ、と言われました。それで一〇〇一年の秋から暮れにかけての鎌倉での五回連続講演のあと、鎌倉から「てらこや」を作つて火の手を上げようと、一〇〇三年から活動を開始しました。最初に建長寺の高井修務総長に相談に行き、夏休みに子どもたちと学生の合宿をしようとしたんです。早稲田大学のゼミ生たちに協力を頼み、お母さんたちに納得してもらうために、夏休みの宿題を見ますよ、と呼びかけたのです。

山根 そうすると最初から学生を育てるというのではなく。

池田 それは後から気づいたことです。大学生が来たときの子どもの反応がさまでしたんです。お兄さん、お姉さんがいるだけで、子どもは、うれしくって、うれしくってしようがない。だから最初から学生が重要なふうに思つたわけではありません。その現場を見て、子どもにはお兄ちゃん、お姉ちゃんが大事で、それから学生が中心になって「てらこや」を運営していくのが定着化していきました。学生自身も一人っ子が多くて、弟妹の味が分からぬ。集まつた子どもたちも一人っ子が多い。その両者のハッピーな出会いが「てらこや」が長続きしている大きな要因だ

と思いますね。

山根 ある意味で大きな家族の再生みたいですね。鎌倉という土地柄もお寺さんが多くて自然が豊かで。

池田 人的環境も自然環境も恵まれています。また鎌倉は宗教都市ですから、建長寺や円覚寺、光明寺や高德院などのお寺さんを使わせていただいている。それがとてもいいことが、ジワジワと学生にも子どもにも分かつてきました。たとえば、注意しても、親や教師だと子どもは言うことを聞かない。ところが、お寺や教会、神社の中でお坊さんや神主さんに言われると違う。宗教施設には、厳かな雰囲気があつて、子どもたちはそこでどんなおな氣持ちになります。

山根 場の力ですね。先生の中にも子どもたちに対する問題意識みたいなものは、おありでしたか？

池田 ぼく自身、大学の教員を三十年近くやつてきましたが、子ども若者の育ちが危ないという危機感がありましたね。日本は経済的にも右肩上がりで九〇年代まできました。しかし足元を見ると、子どもや若者が、不登校、引きこもり、リストカットなどの問題を引き起こしている。いつたい日本はどうなつてしまつたんだろう。教師として何ができるか、と自分の反省を含めて考えました。

山根 先日、大学で言葉をテーマに話し合う中で、奪われたアイヌの言葉について語る方がいらっしゃいました。世界中で言語が奪われて消えていますが、言葉の前に必ず、土地を奪われ、そ

の土地での生活を奪われている。だから言語を取り戻すには、土地を取り戻し、そこで生活を取り戻さなければいけないのではないか、と。それを聞いているうちに、日本の子どもたちが今追い詰められているのは、私たちが経済効率第一で突っ走つて来る中で、子どもたちの遊び場も時間も奪つてきました。そして彼らの言葉を奪つてきたじゃないかという気がして、子どもの言葉を取り戻すには、いわゆる地域社会を回復していくなければいけないんじやないか、と。

池田 たしかに団塊世代の責任は重いですね。そこでどうしたら異世代間の話し合いや交流の場を作つていけるか、さまざま試みをしています。たとえば、「てらこや」は三世代、四世代を結び、家庭、学校、地域の三つの教育の場をつなげる実践活動を展開しています。

山根 子どもを育て、若者、学生を育て、大人自身を育てていこうと。この「てらこや」はできて九年ですね、子どもたちはどう変わりましたか。

池田 いろんな事例が山のようになります。たとえば、活動の一つの「朗読」では、小学校三年生の男の子は内気で恥ずかしくてだれともしゃべれなかつた。でも一年、二年と「朗読」をやっていくうちに自信がつき、自作の詩を発表したり、学校全体の音楽会や集会の司会をするまでになりました。

山根 朗読がそういうかたちで生かされるのも面白いですね。私たちも、読み聞かせや朗読、音声言語をすごく大事にしていますけれど、人間の子どもは学習しないと人間らしい声が出せない数

少ない動物です。推定年齢八歳で山の中で見つかった、狼に育てられた少女は、十八歳で死ぬまで人間らしい声も出せなければ言葉を発することもできなかつた。幼年期にきちんととした美しい发声の、美しい日本語をきちんと聞かせていくことがすぐ大事だということ、コミュニケーションショーンするときには、作者の意図をきちんと読み取つて、それを自分で咀嚼して、それを人に伝えることが朗読の本質ですが、その作業が他者と言葉を交わすときの必要な作業とまったく重なつています。

池田 「朗読」はまず、グループで一つの作品をみんなで読み合います。幼稚園、小学生、中学生、大学生、大人、親たちが、一つの作品を輪読するのですが、だんだん年齢を超えてお母さんよりも、小さい子のほうが、それはこういう気持ちで読んだほうがいいんじゃないのと言います。子どものほうが三回くらい練習すると感情を入れて読めるようになる。一方、大人のほうは、大人としてのテレもあるし、鎧を被つていてなかなか中に入つていかない。子どもは親からいつも叱られているのですが、このときは親に優越感を感じる。逆転していく面白い現象が起ります。

山根 またとない言葉を修得する場でもあつて、子どもの言葉が豊かになつてきますね。大学生たちも変わりますか。

池田 子どもたちより、むしろ大学生の変化の

ほうがすごいかもしません。私のゼミ生は、二年、三年、四年と毎学年二十人ぐらいいますが、全体で六十人ほどいます。彼らは分担して、いろいろな活動を担当しています。なかでもイベントは年に一回、建長寺さんと光明寺さんで行う合宿です。このとき一年生、三年生、四年生、三学年にそれぞれの役割があります。一年生は合宿に来る子どもと付き合えるか、子どもが好きでもどうやって話しかけていいか分からず、三年、四年生の先輩とどう付き合つていいかも分からない、という状態の人が多い。三年生はそれをすでにクリアしているから、各部署の責任者になることができる。四年生は「三年生の背後に回つて、全体の練習や裏方をする。はじめ二年生の一部は子どもたちに言葉かけもできません。でも、合宿参加をやめようか」と悩んだ学生が子どもから「お姉ちゃん、これやろうよ」と声かけられて、スウイッチが入る。子どもと仲良くなつて楽しくなる。三年生になると責任者になるので、子どもとただ楽しいだけではなくて、自分をマネージメントし、どんな準備をするか、学生同士で会議をし、人間関係がいかに大事かが分かつていく。毎週ゼミのあとは「てらこや」ゼミに移つて話し合いを重ね、それから皆で飲み会に行くんです。

山根 これがまた大事ですね。(笑い)

池田 うちのゼミはほぼ毎週、研究ゼミ、「てらこや」ゼミとして飲み会の二点セットです。毎週水曜日は終電です。(笑い) でもこれで横つながりができる支え合うことができるのです。学生同士のチームプレイができます。四年生になる

とくんと違つてきます。自分のことなどすっかり忘れて、二百名近い合宿全体をどうしたらいいか、と真剣に考えます。二年生がデビュー戦でインシエーション。三年は一番大変な実践の力仕事。四年生は全体を見ていく。先輩は後ろに引きながら後輩を育てていく。

山根 ある種の人間力が養われますね。

池田 失敗と挫折を恐れない練習をさせています、きちんと失敗を免げず、挫折にも向き合ふべと。

山根 親自身も成長するんですね。

池田 親は一番遅いですね。(笑い) 壁が厚い。しかし、徐々に心が柔らかくなつて柔軟性が出てきますよ。子どもは親の意思で連れてこられます。そこでも親は子どもに「挨拶しなさい」「ダメよ」とか言って、自分の子どもしか見ていない。学生が「ぼくたちがやりますから、お母さんはちょっと見ててください」と引き離す。親の子離れが「てらこや」では大事です。子どもも親から離れる。学生さんにお任せして大丈夫という安心感で身を引いていくと、親御さんたちは自分の子どもだけではなく全体の子どもを見るようになります。

山根 今の子どもたちの問題を見ていると、まづ親からやらなければいけないですね。

池田 私たちの「鎌倉てらこや」のキャッチフレーズは「親が育ち 子が育つ そんな地域をつくろう!」です。

山根 親が先なんですね。

池田 親が変わらなければ、子どもは変わらないというコンセプトで始めましたが、実際、親なんてそんなに変わらないです。(笑い) 子ども

学生は劇的に変わります。

山根 私も大人を相手にしても間に合わないで、ます子どもの言葉を育てよう。先生は「てらこや教育が日本を変えると」という教育が日本を変えると。

池田 二年ほど前『てらこや教育が日本を変える』(成文堂)という、かなり挑発的なタイトルの本を出しました。子ども、若者、そして大人たちが自らを育てながら地域を変えていく、という心意気を示したかったです。

山根 全国津々浦々の地域で。

池田 今一千箇所ぐらいてらこやがあります。てらこやは、地域ボランティアの方々や全国青年会議所の力をいたでいていますが、地域、地域にある大学生が関わることが何よりも大事です。その土地、土地のいろんな文化風土がありますので、それを生かしていく。大学、市民ボランティア、神社仏閣、この三つのコラボレーションが、私たち「てらこや」の活動の大きい特徴かと思います。てらこや教育で今日明日変わるのは思っていませんが、十年先は絶対変わるだろうと思っています。いろんなボランティアをしてたくましくなってきた若者が社会に出て、そういう人たちが中心になっていく時代になれば、少しは日本は良くなるのではないかでしょう。てらこやを鎌倉でやつたことで宗派の異なるお寺さん同士のネットワークもでききました。

山根 副作用というか。(笑い) 思いがけない交流が生まれて。

池田 そしてこれまで私のゼミの学生が中心でしたが、できるだけ地元化しようということで、

横浜国大、鎌倉女子大、関東学院の学生がどんどん参加するようになっています。

山根 そういう広がりができると、中身も多様になってしまいますね。

最終的に寺子屋の活動で目指しているもの、目標はどういうところですか。

池田 鎌倉に一つの「二十一世紀型コミュニティのひな型を作ろうと。今までの地縁、血縁の共同体ではなくて、新しい共同体、てらこやコミュニティみたいなものを作る。それを日本全国に、世界に発進していく。それで少しでも日本がよくなり、世の中がよくなれば……。それをNPO、非営利組織の中でやっていく。これまでには政府官僚や企業主導だったけれど、民活のNPO活動、ボランティア活動を活発にして、日本をもう少し住みやすい庶民レベルの発想が生かせるような社会にしていきたい、という希望、可能性を感じて、やっています。

山根 今そういう芽生えはいっぱいありますね。これがまた横に連携していくと、もっと豊かにそれぞれの活動が実していくのかなという気がします。

今、家庭で聞く耳を持つていてる大人が周囲にいるという社会状況ですが、いろいろ生きられる社会を目指して活動していくたいですね。でも、このてらこやの考え方は素晴らしいけれど、実践はなかなかできないですよね。

山根 留学もしない。

山根 でもソーシャルワーカーというんですか、ボランティアでなんとか細々と食べていただけるような仕事を見つけ出して、貢献していくたり、自分で起業していく若者が出てきますから。

池田 いわゆる一流の企業に入らない学生も増えてきましたね。これから社会は変わっていくのではないかでしょうか。

山根 今、変わりつつありますものね。

池田 今の若者は一見頼りないのですが、いろいろ時代の青春を思うと、——戦前は皇國少年で戦争に駆り出され、戦時は特攻隊、戦後はイデオロギーの統制、そして六〇年代は「学生運動」——ボランティアに生きる彼らの青春を見て、いる、素晴らしい時代になつたと思います。そんな彼らと行動できて、こちらも青春を取り戻して、もう一度青春と一緒に生きているような感覚を覚えているんですよ。老いたる青春ですが。(笑い)

山根 団塊世代のこれから生き方に大きくなりになりますよね。敬いたいと思います。

のどれが欠けても、明日にはひっくり返つてしまつてもおかしくない。全国の大学がこういう活動をもっと支えてほしいけれど、なかなかむづかしいですね。

学生の質も少しずつ変わっています。おとなしくなつて元気ありませんね。若い人たちが殻をバッと破つてもう少し暴れてほしいですね。

山根 日本人体でそういうことを言っていますよね。今の若い人たちが、それこそ海外に行こうともしないし。